

2021（令和3）年3月、深浦町・岩崎村合併15周年記念誌『深浦のあゆみ』が刊行された。本書は数多くの写真を掲載し、また聞き取り調査の成果を取り入れるなど、新たな自治

体史の形を示すものとなっている。

一方で個々の集落のあゆみを丹念にたどるといふ地域史のスタイルも保たれて

いる。筆者が担当した戦後開拓地・長慶平地区の歴史



旧長慶平小中学校校舎＝2020（令和2）年・筆者撮影

もそのひとつである。

旧満州からの引揚者を中心とした同地区への入植は、1947（昭和22）年10月に開始され、のちに山形県からの入植者も加わる形で進められた。農業経験者はそのうち3割ほどだったという。長慶平という地名は、かつて長慶天皇が津軽紙漉（かみすき）沢へと歩を進めた際、深浦に上陸し吾妻川を上って山越えをしたのではないかと

戦後開拓地の記憶

深浦町長慶平のあゆみ

高瀬 雅弘

（弘前大学教育学部 教授）

という説から付けられたものである。

人びとは炭焼きを生業としつつ、開墾に励んだ。昼だけでは足りず、月の明かりを頼りに鋤を振るった。自家発電設備が完成し、電灯の下で生活できるようになったのは1955（昭和30）年のことである。

1948（昭和23）年2月23日、長慶平の開拓農業組合の事務所に学校が作ら

れた。地域の有志が子どもたちを集めて勉強を教えるようになったのである。小学校分校が正式に設置認可されたのちも、長慶平の学校の開校記念日はこの日とされた。深浦の町から12キロほど離れた学校に赴任した教師たちは、子どもたちに津軽弁の訛がなかったことに驚いたという。

1951（昭和26）年4月には中学校分校も認可・発足し、教育環境の充実がはかられた。その4年後には小中学校が独立校となり、1966（昭和41）年には、深浦町内では最も早く完全給食が実施された。学校は、伝統行事を

持たない新しい地域社会の中心となった。人びとが集う場所は学校であり、コミュニティションの場であった。運動会や学芸会、入学式や卒業式といった学校行事は、そのまま地域の行事になった。

長慶平はたびたび自然の脅威にもさらされた。なかでも1972（昭和47）年の夏には集中豪雨による大水害によって集落は孤立し、

山崩れや田畑の水没といった被害を被った。そうした環境のもとでも、地域の人びとの学校に対する「絶対的な協力」は変わることはなく、子どもたちには「生き物を大切にすゝる気持ち」が育まれていったと当時の教師たちは語っている。

それでも長慶平の子どもたちは、半ば宿命づけられたかのように、学校卒業後は地域を離れていった。地域の少子化にともない、人びとの切実な願いによって創られた学校は、創立から54年を経た2002（平成14）年3月に、その歴史に幕を下ろした。

長慶平小中学校の跡地には「創立五十周年記念」の碑が、学校を見守る高台には「長慶平開拓五十周年記念碑」がそれぞれ建っている。長慶平では、入植開始からの節目ごとに記念誌が編まれた。そこには自らの「記憶」を「記録」しようとする人びとの思いが込められている。こうした事物は、開拓者たちの苦闘と生活の軌跡を今も静かに伝えている。